

〔第11回学術集会公開シンポジウム：家族看護研究のストラテジー〕

家族現象に潜む概念—現象への迫り方と研究デザイン—

岐阜県立看護大学

泊 祐子

看護学における家族現象とは何か。看護学は学問固有の概念をどのように捉えているのかを問い直しながら、本テーマを進めていきたい。

1. 看護学の知の成り立ち

メタパラダイムは、その学問領域のもっとも関心をもつ現象を明らかにするきわめて抽象的な概念をいう。1970年にロジャースが¹⁾ unitary human beingと、人間を環境に統一された存在と捉え、看護学の明確な概念枠組み、メタパラダイムを、健康、環境、人間、看護と創造したことは画期的なことであり、看護学に大きな発展をもたらせた^{1)~3)}。つまり、人間の部分をひとつひとつみるのではなく、全存在としての人間を捉えるという思考は、文化や考え、思想も、全存在としての人間の範囲であり、看護学は意味と価値に拘束された科学であることを明らかにした。

看護学が学の体系化を必死で考えていた時代、ロジャースまでの先人の多くは、自然科学を基盤とする医学モデルを範としてきた。ガリレオガリレイが天体を緻密に観察して、地球が動いていることを発見してから科学は数値や法則によって説明ができる自然科学の思考方法を科学と認めてきた。しかし、人の認識が問題となり、社会・文化・人間という領域にまで自然科学の方法を全面的に適用することはできず、現象学的思考態度を必要とすることに気づいた。

2. 自然科学の方法と現象学的方法

自然科学の思考は、認識によって与えられた事象

を自明のものとする。すなわち、経験(認識)から、さらに経験されないものを推論し、演繹・帰納を行い、現実を説明する。見えているものは在るという前提から出発する。一方、現象学の方法(哲学的思考態度)は、認識と事象との関係に目を向ける。認識体験、認識の意味、認識対象の関係を問題とする。その関係の中で現象をみようとする。見ている自分との間で現象は存在するのである。「事象そのものへ」をモットーにあくまでも現象に即して事態を捉える。我々の認識の対象は、実体そのものではなく、知覚的に現れているものである。実体は五感によってみずから現れてくる。今までの経験・知識をもって五感を通して見ている。認識できるのは、人が五感を通して物を見ているからである。目に見える物は見ている人に見えているのであり、同じものを見えている場合、同じように認識していると思っているが他の人は違うように見えているかもしれない。すなわち、自然科学の思考と現象学の思考では、主観と客観が焦点となる。

現象とは、「一般的にはわれわれに現れてくるものごと、感覚的な知覚に現れてくるものごと、われわれの主観的な観念の相関者としての現れを意味する⁴⁾」。すなわち、何かを知覚しているとき、その人の知覚のなかには多種多様なモノやコトが、何のまとまりもなく、雑多に入り込んでいるが、それらがその人の意識作用のなかで統一され、意味あるものに構成された世界が、その人の見ている現象である⁵⁾。ヘーゲルのいう現象とは、直接に知覚されていない本質内容が具体的かたちをとって存在するようになった⁶⁾ものである。

3. 現象学的思考態度

現象学は20世紀初頭にフッサールが創唱した哲学的立場である。フッサールのもとでも幾度かの進化を遂げ、その後もハイデガー、サルトル、メルロポンティのもとでもさまざまに脱皮を繰り返した⁷⁾⁸⁾。しかし、誰の立場でも変わらない現象学の根本的な考えは、開かれた方法論的態度、研究対象に立ち向かう思考の態度であり、本質の研究といえる。フッサールが問題にした現象は、私たちの生活世界の経験している生きられた経験の意味を問うことである。たとえば、バラの存在ではなく、「バラを見ているという自分の経験」が大事なことである。フッサールは、諸科学が「客観的」対象だと思込んでいるものは、諸主観の間でたまたま共通理解が成立したある関係性であり、「客観」があらかじめ存在するものではなく、相互主観的に構成されたものに過ぎない⁹⁾という。

ものを見る角度、視点、遠近距離により見え方が変わる経験はよくする。現象を見るといっても現実の世界は、多くのコト、モノが混在する。混在している中で、自分が見ようと思うモノ、コトを注視すると見ようと思う物が浮き出て、その他の物は背後に押しやられ地になる。見ようと思う見る人の意志によって見えてくる¹⁰⁾のである。

現象 すなわち「人間の意識に内在するモノ」を分析して、今までこうだと思われきたものをかなぐり捨て、一度判断中止、【 】(カッコ)に入れて純粹意識になり、現象の真の意味を探求する。それは今までの考えを捨てて白になるのではない。無意識の偏見、思い入れを【 】(カッコ)に入れると、自分の意識が自由になり、変更可能になる。意識が何を志向しているのかが分れば、その人の意識、行為、態度の意味がはっきりする。現象の奥に隠れている存在を明らかにでき、現象の真の意味を探求できる¹¹⁾。

4. 家族の定義

家族を対象に研究をする場合には、研究者が家族をどのようにみるのか、家族をどのように定義して家族をみようとしているのかを明確しなければならない。見る人の視点によって見え方が異なることは先に説明した。

家族看護学は、その理論ベースに家族社会学理論をよく取り入れている。家族社会学は、家族にかかわる社会現象を対象に研究している¹²⁾。看護学では、現象が看護にかかわるものである場合に看護現象と呼び⁵⁾、研究の焦点とする。家族看護学においては、看護学の範疇における家族にかかわる現象を研究対象とするとおいてみる。

家族の定義のしかたは、家族の形態、家族制度、家族構造、集団など、学問領域や理論・枠組みによって様々である。しかし、現代の家族の中にはその成員たちが憎しみあつたりお互いに回避し、「病理発生的な第一次集団」の場合もある。また、「家族は集団である」という定義ができないこともある。バージェス¹³⁾(1926)は、多数の国からの移民学生に講義し、学生たちの考える家族をレポートさせ、家族の共通項を見だし、家族を「相互作用しあう複数のパーソナリティの結合体」と定義した。学生たちの経験した主観をデータとしており、このような定義づけの仕方には、学ぶところが多い。この定義は、人が経験し認識した家族現象そのものであるといえる。また、中心とする人によって家族の範囲が異なるので、どの人を視点に家族の範囲をとるのか注意を要する。

5. 研究デザイン

研究デザインを決めるときには、1)自分は家族のどのようなことをみたいのか、この現象をどのように見つめようとしているのかははっきりさせる。2)自分がどのように家族を定義したのか、よく吟味することである。研究方法論が先にあるのではなく、何が

みたくて、この現象を捉えようとしているのか。自分の研究の問いを明確にさせて、適切な研究方法を選択する。

実存的現象学的思考とするならば、観察や実験、調査方法を用いて研究をしたとしても、TATやロールシャッパなどのテストを用いたとしても、それを性格、人格診断のために用いるのではなく、その人の隠れた存在(見えない部分を見る)を明らかにするために用いる。家族員それぞれの存在がどうであるのか、家族員間の関係の状態をみる。個人の存在のあり方を志向する(目を向ける)。私たちは家族を経験しているだけに自分の価値観や、経験則でものを言いやすい。病気の経験は看護者全員が経験している訳ではないが、家族は全員が何らかの方法で経験している。そのため純粋意識になることが他の問題よりもっと難しい。意識して自分のものの考え方を意識化することが重要である。

6. 概念化する意味：現象への命名

その事物や現象に名前を与えることによって、はじめてその現象が独自に存在し始める。概念は、主語ないし述語として用いる普遍的な観念、普通名詞で表現される。複数の経験(事物、事象、関係)に共通する一般的特性を抽象したもので、概念の内包と外延を定め、明確にする¹⁰⁾。たとえば、心理学者のポウルピィ¹⁴⁾が「アタッチメント」という用語を学術用語に概念化するまでは、単純なもののくっついた様という意味しかなかった。今ではアタッチメントと聞くと、赤ちゃんとお母さんの温かいきずなが思い浮

かぶ。この概念の意味を知っていれば、何を言いたいのか、多くの言葉を言わなくても了解できる。

看護学も概念化が進むと、看護学固有の学術用語がどんどんもてるようになる。NANDAが中心となり、行っている看護診断用語の生成は、まさにこの学問固有の学術用語の確立である。家族看護研究においても、家族現象に命名でき概念が明確になると、状況が共通了解されやすく、家族援助のアプローチが効果的に行われやすくなるであろう。

文 献

- 1) M. ロジャース：樋口康子、中西睦子訳、ロジャース看護論、医学書院、1983
- 2) ローズマリー・リゾ・パースィ監訳：高橋照子、パースィ看護論 人間生成の現象学的探求、医学書院、2004
- 3) M. マリンスキー、E. バイオレット編、手島 恵監訳：マーサ・ロジャースの思想 ユニタリ・ヒューマンピーングズの探求、医学書院、1998
- 4) 木田 元：現象学事典、千田義光、120—121、弘文堂、1999
- 5) 野島良子：看護学の根本問題、日本看護科学会誌、12(4)：1—8、1992
- 6) 加藤尚武：ヘーゲル事典、弘文堂、1992
- 7) 木田 元：現象学、岩波新書、1975
- 8) 竹田青嗣：現象学入門、日本放送協会出版会、1999
- 9) 竹田青嗣：初めての現象学、海鳥社、114—117、1993
- 10) 野島良子：看護学における学術用語の生成と諸問題、看護研究、32(5)：3—10、1999
- 11) 那須宗一、上子武次：家族病理の社会学、弘文堂、1977
- 12) 野々山久也、渡辺秀樹：家族社会学入門 家族研究の理論と技法、文化書房博文社、1999
- 13) 比較家族史学会編：事典 家族、130—135、弘文堂、1995
- 14) J. ポウルピィ：黒田実郎、大羽 薫、岡田洋子、他訳、新版母子関係の理論Ⅰ 愛着行動、岩崎学術出版、1976